

[Discovery Days 活動報告]

ワークショップ

江戸ムスメの理想肌



ポーラ文化研究所では、ポーラ・オルビスグループの知見を生かして江戸時代の白粉の感触を再現、当時の女性たちがめざした肌や仕上がりを体感するワークショップを行っている。日本における白粉の歴史についての簡単なレクチャーと、再現した白粉に触れる2部構成となっており、長く化粧品の研究開発を行ってきた化粧品メーカーならではのプログラムとして実施しているものである。

レクチャー 鉛白粉の禁止までの日本のベースメイクの道のり

日本の白粉の記録は古く、奈良時代にまで遡ることができる。白土や胡粉などのほか、江戸時代には「玉のような」理想肌に仕上げる「鉛白粉」が広く普及していた。鉛は人体にとって有毒だが、「つき、のび、のり」といった使用感の良さから、長い間ベースメイク料として使われ続けてきた。粉末状の白粉は「白粉包（おしろいつつみ）」という紙製の袋に入れて販売された。小野小町や楊貴妃などの女性像、役者絵などが刷られたものもある。白粉は水や化粧水で溶いてリキッド状にして刷毛や手で伸ばしたり、粉のままはたいたりした。水溶きする際には白粉三段重（おしろいさんだんがさね）という3層の陶器製容器が使われ、最下段に水を入れ、上の2段をパレットとして使用したとされる



江戸～明治時代の白粉包、白粉三段重



江戸名所百人美女 柳はし 三代歌川豊国、歌川国久 (こま絵)、安政5年 (1858) (国文学研究資料館撮影)

江戸時代後期の総合美容読本『都風俗化粧伝』¹では、白粉の塗り方に多くのページを割いており、ベースメイクを大事にしていたことの表れと言えるのではないだろうか。鼻筋を濃く塗り重ねてハイライトのように使ったり目の周りを薄く塗ったり、生え際をぼかす方法は現代のメイクにも通じる。



『都風俗化粧伝』より、白粉の塗り方

ポーラ文化研究所で所蔵している江戸後期の浮世絵には「美艶仙女香」という白粉の値段が描かれているものがある。江戸時代の貨幣価値は現代との比較が難しいとされるが、江戸後期のそば1杯の値段はおおよそ16文、現代のそばスタンドのかけそば1杯の値段が430円程度とすると、白粉包一袋分の価格は1300円程度だったことがわかる。

¹ 佐山半七丸[著], 速水春曉齋画図. 都風俗化粧伝. 河南喜兵衛[ほか], 1813.



《美艶仙女香 婦じ美多意》 溪斎英泉、文政頃（1818-1830 頃）（国文学研究資料館撮影）

明治時代に入っても鉛白粉の使用は続くが、医学界を中心にその毒性に警鐘を鳴らす動きも出てきた。決定的な「事件」とされるのが、明治20年（1887）に時の外相・井上馨邸で行われた天覧歌舞伎での出来事である。歌舞伎役者の中村福助が舞台上で発作を起こし、その原因が長年使い続けた鉛白粉とされた。同時期に、化粧品メーカーを管轄していた警視庁が、当時流通していた白粉に含まれる鉛の有無を調査し新聞に結果を公表したが、かなりの商品に鉛が含まれていた。政府は着色料として鉛の使用を禁止するが、当時の技術力では鉛白粉に勝る使用感の製品化が難しく、化粧品業界は化粧品への使用の除外を嘆願。その後、品質がよいものなら有鉛でも問題ないといった、現代からしたら考えられないような見解も出ている。明治時代の終わりに胡蝶園から無鉛白粉が発売されたのを皮切りに、徐々に無鉛をうたった商品が発売されるようになるが、最終的に化粧品への使用が禁止となったのは、昭和10年（1935）のことだった。

再現白粉体験

白粉の使用感は先にも述べたように、つき、のり、のびといった、フィット感で表現されるが、実際にはどのような感触だったのだろうか。レクチャーの後は、再現白粉の感触を体験してもらった。

ポーラ文化研究所ではポーラ化成工業の協力を得て、現代のベースメイク料に使われている原料を使って、鉛白粉の感触の再現を実現した。感触の比較のために白粉として用いられていた胡粉

の使用感も再現した。今回は水溶きはせずに粉末のままの体験であったが、参加者は指先で白粉をつまんだり実際に手の甲に白粉を塗ったりして感触を味わうと同時に、白粉をつかって化粧をする、江戸時代の女性たちのよそおう気持ちや化粧への思いにも想像を巡らせていた。

(文責：富澤 洋子)